

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載
【部門区分】第 1 部門第 2 区分
【発行日】令和 5 年 11 月 8 日(2023.11.8)

【公開番号】特開 2022-42396(P2022-42396A)
【公開日】令和 4 年 3 月 14 日(2022.3.14)
【年通号数】公開公報(特許)2022-045
【出願番号】特願 2020-147812(P2020-147812)
【国際特許分類】
A 6 3 F 7/02(2006.01)
【F I】
A 6 3 F 7/02 3 0 4 D

10

【手続補正書】
【提出日】令和 5 年 10 月 27 日(2023.10.27)
【手続補正 1】
【補正対象書類名】特許請求の範囲
【補正対象項目名】全文
【補正方法】変更
【補正の内容】
【特許請求の範囲】
【請求項 1】

20

第 1 演出に関わる第 1 電気部品と、
第 2 演出に関わる第 2 電気部品と、
第 1 基板と、
を有し、
前記第 1 基板には、
外部の基板から入力された所定レベルの電源電圧を、第 1 電源電圧として前記第 1 電気部品に供給する第 1 電源ラインと、
前記電源電圧を、第 2 電源電圧として前記第 2 電気部品に供給する第 2 電源ラインと、
が形成され、
前記第 1 電源ラインと前記第 2 電源ラインは保護回路を介して接続されており、
前記第 1 電源電圧と前記第 2 電源電圧のうちの一方の電源電圧のみが、前記第 1 基板から第 2 基板に出力され、
前記第 2 基板では、前記第 1 基板から供給された前記一方の電源電圧を、保護回路を介して接続された複数の電源ラインに供給し、
前記第 2 基板における前記複数の電源ラインの 1 つはモータ駆動のための電源ラインである
遊技機。

30

40

【手続補正 2】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】0 0 0 5
【補正方法】変更
【補正の内容】
【0 0 0 5】

本発明の遊技機は、第 1 演出に関わる第 1 電気部品と、第 2 演出に関わる第 2 電気部品と、第 1 基板と、を有し、前記第 1 基板には、外部の基板から入力された所定レベルの電源電圧を、第 1 電源電圧として前記第 1 電気部品に供給する第 1 電源ラインと、前記電源電圧を、第 2 電源電圧として前記第 2 電気部品に供給する第 2 電源ラインと、が形成され、前記第 1 電源ラインと前記第 2 電源ラインは保護回路を介して接続されており、前記第

50

1 電源電圧と前記第 2 電源電圧のうちの一方の電源電圧のみが、前記第 1 基板から第 2 基板に出力され、前記第 2 基板では、前記第 1 基板から供給された前記一方の電源電圧を、保護回路を介して接続された複数の電源ラインに供給し、前記第 2 基板における前記複数の電源ラインの 1 つはモータ駆動のための電源ラインである。

また遊技機は、複数の発光素子と、演出制御信号に基づいて前記複数の発光素子を発光駆動する発光駆動部と、を有する第 1 基板を備え、前記発光駆動部は方形状のチップ部品であって、第 1 辺に前記演出制御信号に含まれる発光駆動データ及びクロック信号の入力端子が形成され、第 2 辺、第 3 辺、第 4 辺に前記発光素子の駆動信号の出力端子が形成されており、前記第 1 基板では、前記第 1 基板における前記発光駆動部の周囲の領域を、前記第 1 辺に対向する第 1 領域と、前記第 2 辺、前記第 3 辺、前記第 4 辺に対向する第 2 領域に分けたときに、前記第 1 領域は発光素子が配置されていない領域となり、前記複数の発光素子の全てが前記第 2 領域に配置された状態となるように、前記発光駆動部の配置位置及び向きが設定されていてもよい。

10

また前記第 1 領域は、前記第 1 辺の一端から前記第 1 辺の正面側に伸ばした前記第 1 辺に垂直な第 1 仮想線と、前記第 1 辺の他端から前記第 1 辺の正面側に伸ばした前記第 1 辺に垂直な第 2 仮想線と、を想定した場合に、前記第 1 仮想線と前記第 2 仮想線の間となる領域であることが考えられる。

また前記第 1 領域は、前記第 1 辺の一端から、前記第 1 辺を形成する直線を延長させ、かつ前記一端からの延長部分を前記第 1 辺の正面側に略 4 5 度折り曲げた第 1 仮想線と、前記第 1 辺の他端から、前記第 1 辺を形成する直線を延長させ、かつ前記他端からの延長部分を前記第 1 辺の正面側に略 4 5 度折り曲げた第 2 仮想線と、を想定した場合に、前記第 1 仮想線と前記第 2 仮想線の間となる領域であることが考えられる。

20

また前記第 1 領域は、前記第 1 辺を含む仮想線よりも前記第 1 辺の正面側となる領域であることが考えられる。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 1 6

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 1 6】

30

また雇 6の上部の両側と発射操作ハンドル 1 5 の上側とには、音響により音演出効果（効果音）を発揮するスピーカ 4 6 が設けられている。図 1 では雇 6の上部の 2 つのスピーカ 4 6 のみを示している。

複数のスピーカ 4 6 により、演出に関する音などについて、いわゆるステレオ音響再生や、より多チャンネルの音響再生を行うことができるようにされている。

【手続補正 4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 4 3 4

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 4 3 4】

40

コネクタ C N 4 Q は、位置検出スイッチ 8 3 1（図 5 8 参照）に接続される。

第 1 ピンは 1 2 V 直流電圧（D C 1 2 V B）、第 2ピンはグランドの端子とされる。第 2 ピンは、接続された位置検出スイッチからのセンス信号 S E N S v 7 の入力端子となる。

【手続補正 5】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 4 9 7

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 4 9 7】

50

図 4 6 に示したように盤裏下中継基板 8 0 0 のコネクタ C N 1 Q (及び伝送線路 H 3 0) は、1 2 V 直流電圧 (D C 1 2 V B) について 2 本の線路を用いており、一方、コネクタ C N 3 Q (及び伝送線路 H 3 1) は、1 2 V 直流電圧 (D C 1 2 V B) について 6 本 の線路を用いている。

下流側での伝送線路 H 3 1 の方が、上流側の伝送線路 H 3 0 よりも 1 2 V 直流電圧 (D C 1 2 V B) 用いる線路数を多くしていることで、下流側のコネクタを小型化したい場合に有利な構成となる。

【手続補正 6】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 5 0 1

10

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 5 0 1】

以上から、下流側のコネクタ C N 3 Q が小型化されていることがわかる。

即ち、コネクタ C N 3 Q 及び伝送線路 H 3 1 で、1 2 V 直流電圧 (D C 1 2 V B) について 6 ピン、6 線路を用いていることにより 1 つのピンに対する電流負担を軽減させ、上記のように小型で定格電流の小さいコネクタ C N 3 Q の採用を可能としている。小型のコネクタを採用できることで、盤裏下中継基板 8 0 0 において、基板上のレイアウト余裕の拡大、設計の自由度の向上、或いは基板の小型化に有効となる。

【手続補正 7】

20

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 5 1 9

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 5 1 9】

第 2 基板である盤裏下中継基板 8 0 0 のコネクタ C N 3 Q は、上述の図 5 3 のように小型のものを用いている。このため、装飾基板 8 2 0 のコネクタ C N 1 S も 同様に図 5 3 のコネクタとなる。

【手続補正 8】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 5 2 1

30

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 5 2 1】

また、コネクタ C N 1 S は基板上で高さのある部品となるが、コネクタ C N 1 S として比較的低いものを採用できる。可動物の場合、なるべく高さが低い基板を用いることが望ましい。可動物の妨げとなることを防止したいという要請や、なるべく可動物内部に配置したいなどの事情による。このため高さのサイズ S 3 が低いコネクタであることが有効となる。またこの意味では、図 5 3 のようなサイド型のコネクタの方が、トップ型よりも望ましいことにもなる。

40

【手続補正 9】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 5 2 6

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 5 2 6】

但し、フレキシブルケーブルの場合、1 本の線路に流せる電流が少ない。

そこで、盤裏下中継基板 8 0 0 において伝送線路 H 3 0 からコネクタ C N 1 Q により 2 本の線路により受けた 1 2 V 直流電圧 (D C 1 2 V B) を、コネクタ C N 3 Q 及び伝送線路 H 3 1 では、6 本の線路を用いて装飾基板 8 2 0 に供給している。これによりフレキシ

50

ブルケーブルを用いても十分な電力供給を行い、装飾基板 8 2 0 において適切な L E D 発光を実現する。

また、装飾基板 7 4 0 において伝送線路 H 2 2 からコネクタ C N 1 L により 2 本の線路により受けた 1 2 V 直流電圧 (D C 1 2 V B) を、コネクタ C N 4 L 及び伝送線路 H 2 3 では、3 本の線路を用いて中継基板 7 6 0 に供給している。また同じくコネクタ C N 1 L により 1 本の線路により受けた 5 V 直流電圧 (D C 5 V) を、コネクタ C N 4 L 及び伝送線路 H 2 3 では、3 本の線路を用いて中継基板 7 6 0 に供給している。これによりフレキシブルケーブルを用いても中継基板 7 6 0 以降に十分な電力供給を行っている。

なお図 4 3 , 図 4 4 からわかるように、伝送線路 H 2 3 では、クロック信号 CLK_C、データ信号 DATA_C は 1 本の線路で伝送している。つまりフレキシブルケーブルを用いる場合、電源供給は通常のハーネスと比べて線路数を多くするが、クロックや制御データの信号は 1 本で行うようにしている。

10

【手続補正 1 0】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 5 3 9

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 5 3 9】

この（構成 C 1）の場合、次のように対応する例（具体例 3）が想定される。

（具体例 3）

20

- ・第 1 基板：枠 L E D 中継基板 8 4 0
- ・第 2 基板：内枠 L E D 中継基板 4 0 0
- ・第 3 基板：前枠 L E D 接続基板 5 0 0
- ・第 1 伝送線路：伝送線路 H 7
- ・第 2 伝送線路：伝送線路 H 8
- ・第 1 コネクタ：コネクタ C N 1 B
- ・第 2 コネクタ：コネクタ C N 2 B

【手続補正 1 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 5 4 0

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 5 4 0】

この場合のコネクタ C N 1 B , C N 2 B については図 4 9、図 5 0 に示し、その仕様についても上述したとおりであり、異なる種類のものが用いられている。特に下流側を接続するコネクタ C N 2 B は上流側を接続するコネクタ C N 1 B よりも小型としている。

即ち、上流から下流にかけて電氣的に接続される枠 L E D 中継基板 8 4 0、内枠 L E D 中継基板 4 0 0、前枠 L E D 接続基板 5 0 0 において、内枠 L E D 中継基板 4 0 0 では上流側のコネクタ C N 1 B と下流側のコネクタ C N 2 B の種類が異なることで、下流側の基板の小型化も実現でき、下流側での基板等の部品配置に有利となる。

40

【手続補正 1 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 5 6 5

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 5 6 5】

扉 6 の左下に配置される前枠 L E D 接続基板 5 0 0 のコネクタ C N 3 C に接続された伝送線路 H 9 としてのハーネスは、扉 6 の左サイドに沿って上方に向かい、上端部近傍で右に向けられて中継基板 5 5 0 のコネクタ C N 1 D に達する経路とされる。

中継基板 5 5 0 のコネクタ C N 2 D に接続された伝送線路 H 1 0 としてのハーネスは扉

50

6 の上端部から左上角部に沿ってサイドユニット 10 に取り付けられたサイドユニット右上 L E D 基板 600 のコネクタ C N 1 E に達する経路とされる。

サイドユニット右上 L E D 基板 600 のコネクタ C N 2 E に接続された伝送線路 H 1 2 としてのハーネスは伝送線路 H 1 0 の経路を戻るように進んでサイドユニット上 L E D 基板 630 のコネクタ C N 1 T に達する経路とされる。

【手続補正 13】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0571

【補正方法】変更

【補正の内容】

10

【0571】

中継基板 550 から信号が伝送されるサイドユニット右上 L E D 基板 600 は、サイドユニット 10 内の各基板の最上流となる。例えば下流にサイドユニット上 L E D 基板 630 やサイドユニット右下 L E D 基板 620 が存在する。

さらにサイドユニット右上 L E D 基板 600 には、上述のコネクタ C N 4 E に接続されるサイドユニット右上可動物モータ 104、コネクタ C N 5 E に接続されるサイドユニット右上可動物ソレノイド 105、コネクタ C N 6 E に接続されるプロア 106、コネクタ C N 7 E に接続されるサイドユニットデバイス 101 におけるセンサなどがある。

【手続補正 14】

【補正対象書類名】明細書

20

【補正対象項目名】0615

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0615】

これは、第 2 基板であるサイドユニット右上 L E D 基板 600（もしくはサイドユニット上 L E D 基板 630 以外の下流の基板）がモータドライバを有し、一方、第 3 基板であるサイドユニット上 L E D 基板 630 はモータドライバを有していないことを意味する。

モータ駆動には比較的大電流を用いる。また 3 相駆動、4 相駆動などのモータ駆動の事情により線路数も多く必要になる。もしサイドユニット上 L E D 基板 630 がモータドライバを搭載するものであったり、或いは個々のモータを中継する基板であったりすると、伝送線路 H 1 2 において 12 V 直流電圧（D C 12 V B）の伝送に用いる線路数が多く必要になる。

30

本例の場合、サイドユニット上 L E D 基板 630 に対してモータ駆動制御の信号を伝送しない。つまりサイドユニット上 L E D 基板 630 にモータ駆動の機能を持たせない。これによりサイドユニット上 L E D 基板 630 における回路の簡易化やコネクタの小型化を実現し、最下流で比較的前方に配置されるサイドユニット上 L E D 基板 630 の小型化を促進できるようにしている。

【手続補正 15】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0661

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0661】

40

また実施の形態の遊技機 1 は、上記の（構成 G 2 - 1）又は（構成 G 2 - 2）に加えて、次の（構成 G 2 - 3）を有する。

（構成 G 2 - 3）

前記保護回路は、前記第 2 電源ラインから前記第 1 電源ラインへの逆電流防止のためのダイオードを用いた保護回路である。

【手続補正 16】

【補正対象書類名】明細書

50

【補正対象項目名】 0 7 9 5

【補正方法】 変更

【補正の内容】

【 0 7 9 5 】

バッファ回路 5 0 4 はコネクタ C N 1 C から出力する信号のバッファ処理を行うものであり（図 1 6 参照）、コネクタ C N 1 C の近傍に配置されている。

モータドライバ 5 1 0、5 1 1、電源分離 / 保護回路 5 2 1 は方形範囲の図面左上方部分に配置されている。

S / P 変換回路として用いられる L E D ドライバ 5 0 9 は図面右上方部分に配置されている。

10

【手続補正 1 7 】

【補正対象書類名】 明細書

【補正対象項目名】 0 8 4 2

【補正方法】 変更

【補正の内容】

【 0 8 4 2 】

なお「配線」とは、プリントパターン、ベタパターン、スルーホール、ビア、ジャンパー線材、特定の導体部分など、基板上の部品間を電氣的に接続するものをいう。

そして、スピーカ駆動信号を入力側コネクタから配線のみを介して出力側のコネクタに供給する、ということはスピーカ駆動信号が、前枠 L E D 接続基板 5 0 0 上で、例えばバッファ回路 5 0 1、5 0 4、5 0 2、5 0 3、5 1 2、L E D ドライバ 5 0 9、モータドライバ 5 1 0、5 1 1 等や、抵抗、コンデンサ等の電子回路部品を介さないで入力側コネクタから出力側のコネクタに供給されるという意味である。

20

つまりスピーカ駆動信号を入力側コネクタから配線を除く電子回路部品でなんらかの処理（もちろん配線の抵抗成分や容量成分による作用は除く）をすることなく出力側のコネクタに供給して基板外部のスピーカに出力する構成ともいえる。

【手続補正 1 8 】

【補正対象書類名】 明細書

【補正対象項目名】 0 8 5 9

【補正方法】 変更

【補正の内容】

【 0 8 5 9 】

[6 . 1 3 パターン構成]

実施の形態の遊技機 1 は次の（構成 N 1 - 1）を有する。

（構成 N 1 - 1）

遊技機 1 は、表面を形成する表面層と、裏面を形成する裏面層と、前記表面層と前記裏面層の間に形成される 1 又は複数の内層と、を有する複数層構造とされた第 1 基板を有し、前記内層の少なくとも 1 つは、前記表面層又は前記裏面層と比較して、基板端部に近い位置まで導電体パターンが形成されている。

30

【手続補正 1 9 】

【補正対象書類名】 明細書

【補正対象項目名】 0 8 6 2

【補正方法】 変更

【補正の内容】

【 0 8 6 2 】

これに対して図 6 8 に示す第 1 内層では、上端部 U P 及び左端部 L S の近辺は、表面層と裏面層における斜線部に相当する領域にまで進入するようにパターン形成されている。

40

また図 6 9 に示す第 2 内層では、上端部 U P、左端部 L S、右端部 R S の近辺は、表面層と裏面層における斜線部に相当する領域にまで進入するようにパターン形成されている。

50

つまり第 1 内層、第 2 内層は、表面層や裏面層と比較して、基板端部に近い位置まで導電体パターンが形成されている。

【手続補正 2 0】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 9 9 0

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 9 9 0】

また実施の形態の遊技機 1 は、上記の（構成 P 4 - 1）に加えて、次の（構成 P 4 - 2）を有する。

10

（構成 P 4 - 2）

前記第 1 基板では、第 1 距離 $d E 1$ ：第 2 距離 $d E 3 = 6 : 4$ から $4 : 6$ となるように、前記発光駆動部と前記複数の発光素子が配置されている。

【手続補正 2 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 9 9 1

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 9 9 1】

この場合の第 1 距離 $d E 1$ と第 2 距離 $d E 3$ の相対関係を図 7 8 B に示した。

20

第 1 距離 $d E 1$ + 第 2 距離 $d E 3$ としての値を図示する全長としたときに、図 7 8 B は、第 1 距離 $d E 1$ が、 $(d E 1 + d E 3)$ の値の 4 0 % の長さの場合と、6 0 % の長さの場合を示している。

第 1 距離 $d E 1$ と第 2 距離 $d E 3$ の長さの関係が、この範囲内であるとするのが、第 1 距離 $d E 1$ ：第 2 距離 $d E 3 = 6 : 4$ から $4 : 6$ の範囲内になるということである。

【手続補正 2 2】

【補正対象書類名】図面

【補正対象項目名】図 5

【補正方法】変更

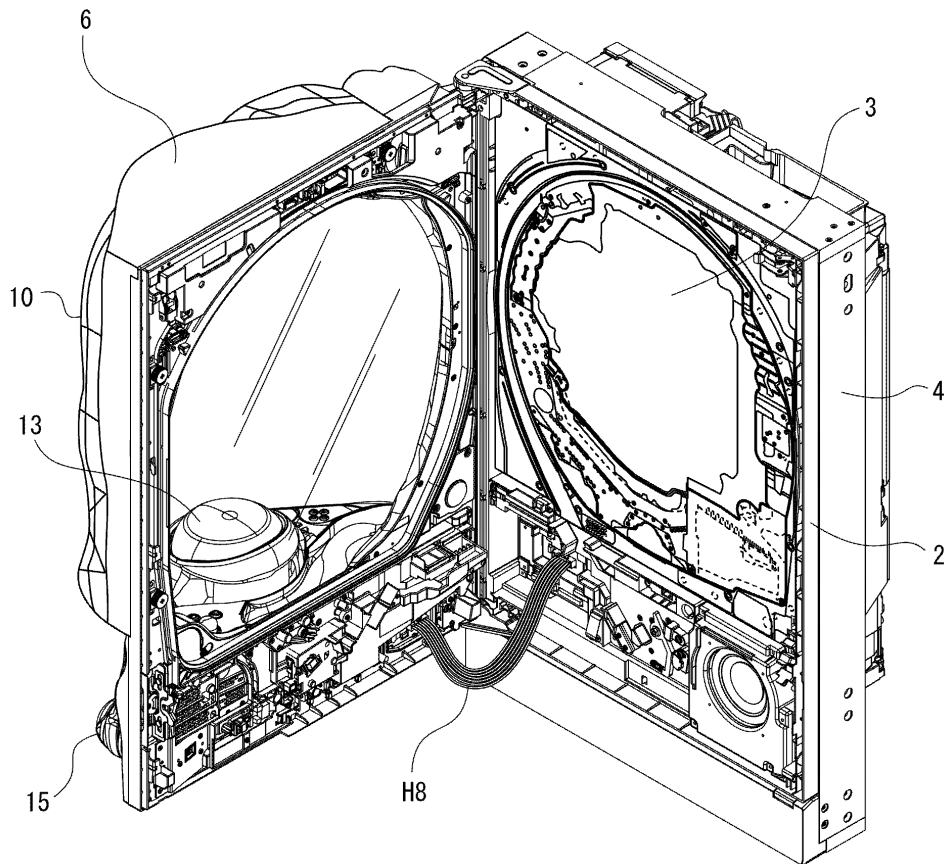
【補正の内容】

30

40

50

【図 5】



10

20

30

40

50

【手続補正 2 3】

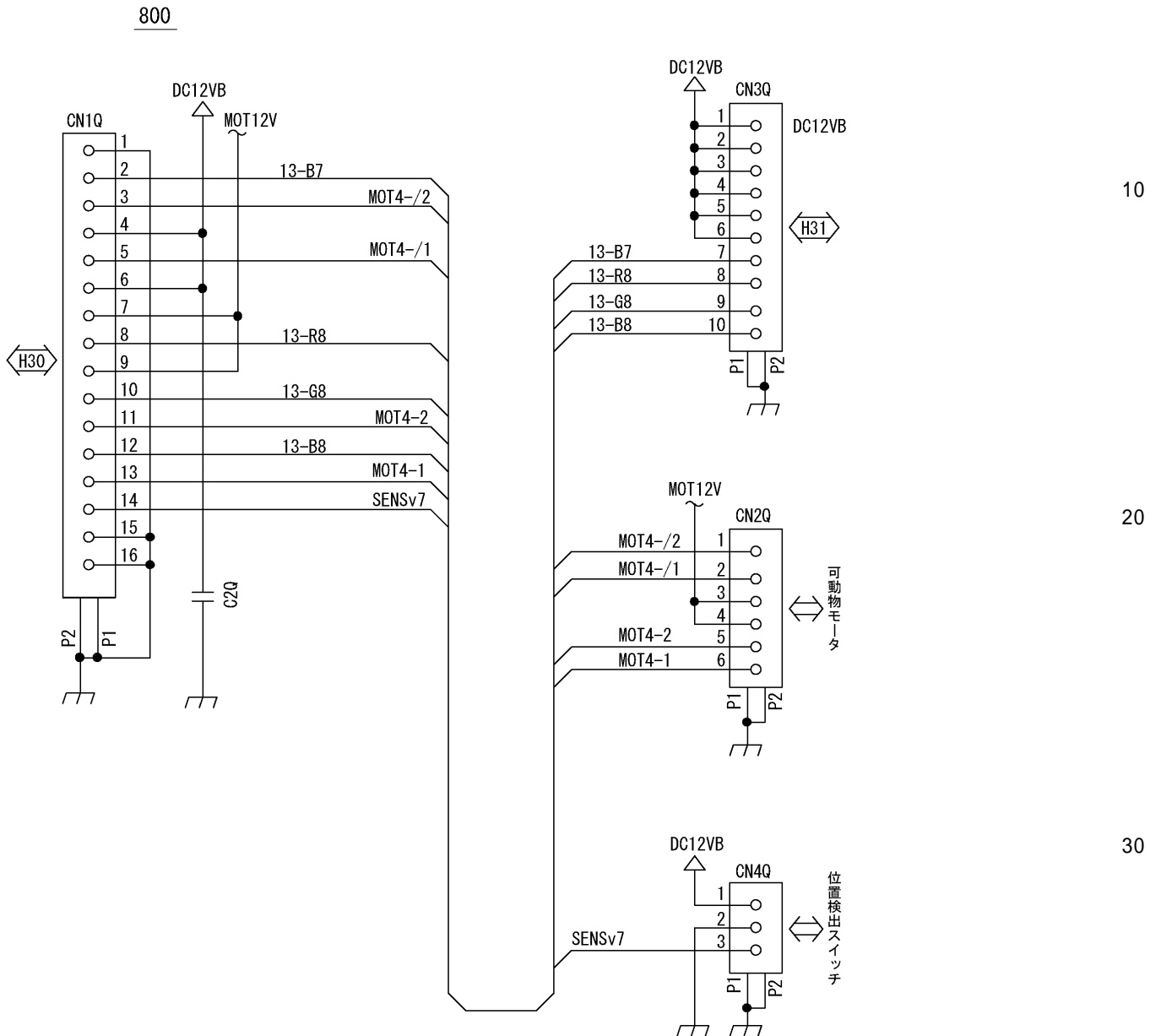
【補正対象書類名】図面

【補正対象項目名】図 4 6

【補正方法】変更

【補正の内容】

【 図 4 6 】



【 手続補正 2 4 】

【 補正対象書類名 】 図面

【 補正対象項目名 】 図 7 3

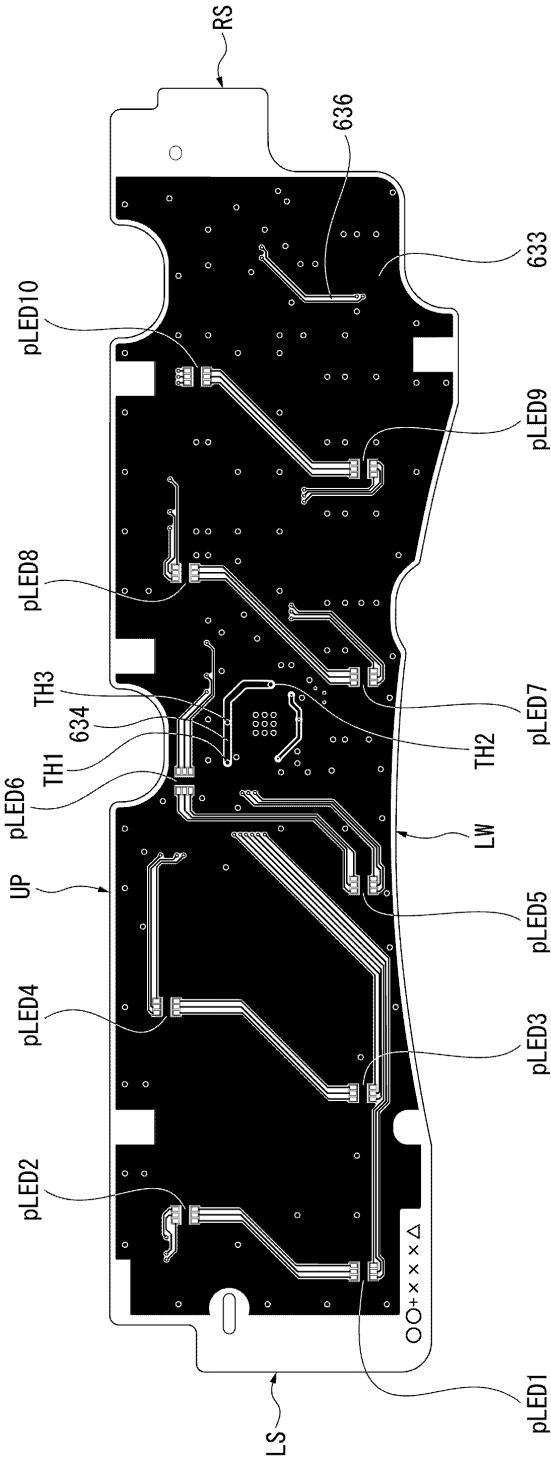
【 補正方法 】 変更

【 補正の内容 】

【図 7 3】

表面層

630A(サイドユニット上LED基板)



10

20

30

40

50